

幼稚園も保育所も、多勢の子どもを対象としてゐる集団保育の場である。しかし、いくら多勢の子どもが集まっても、ただごたごたより集まっているだけでは、烏合の衆にすぎない。それでは集団教育にはならない。そこでそれに秩序を与えようと、ピアノの合図をつくって、みんなが順序よく立ったり坐ったり、一定の方向に動いたりするような試みをする。それが成功すると、先生の合図にしたがって、秩序正しく動いているようにみえる。しかしそこには子ども相互の交流関係は成立してゐないのであつて、むしろ先生の合図にあやつられてゐるにすぎない。集団保育としてもっと必要なことは、子ども同志の間で話し合つて、おたがいの考えてゐることを知り、自分自身の行動をも反省するようになることである。そのような実質的な集団関係は、二人、三人とか数人までの小さなグループでないときにくい。ことに幼児の場合には、数人をこえる人数になると、実質的な集団は成立しにくい。幼児の集団保育は、このような実質的な集団から出発しなければならぬのである。それによつて幼児は集団の中で行動することを学んでゆくのである。おたがいに話し合うこと、

またおたがいに話しながら仕事をしたり遊んだりするところに実質的な集団保育の場がある。

集団ということを強調すると、ともすると個人を無視するかのような誤解をうけやすい。たしかに個人と集団とどちらをより重んずるかという点、集団をとるものもある。個人を伸ばすことを目的とする場合と集団それ自身を伸ばすことを目的にするものがある。しかし集団がのびるためには個人が無視されてもよいと考えるならば、それは誤りである。また集団に適應することだけが集団性を養うことでもない。ある場合には集団の一般傾向に抵抗しても、自分だけが正しいと思うことを主張することも必要である。

個を伸ばすためには集団教育の場が必須であり、集団を發展させるためには個を豊かにすることが必要である。両者は矛盾せずによくことのできるはずなのである。個が集団の手段となつてはならないし、また集団の手段になつてもならない。前者は全体主義になるし、後者は利己主義になる。また秩序を重んじるだけの集団保育は、表面をとりつくろうだけのものになる。

(T)

幼児の教育 第六十一巻 第十号

十月号 © 定価六〇円

昭和三十七年九月二十五日 印刷

昭和三十七年十月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行者 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いたします。